

大阪のひと

第一話 暮れてゆく その一

峯 正澄

かまど。同じ工場のはしにありながら、この一角はまったくがつている。

上役もめつたにやっこない。自由で友愛にみちた雰囲気で、卑屈な、さもしいものももうまったく見られない。調整工の役を引き受けている、感じのいい少年……溶接工……ブロンドの髪の若いイタリア人……わが「婚約者(フィアンセ)」氏……その兄弟……イタリア人の女……木づち係のたくましい若者……

とにかく、楽しい作業場だ。協同作業。製罐の機械、器具類、とくに木づち。小さな手動機械で曲げを与え、次いで木づちで形をととのえる。だから、手先の器用なことが第一に要求される。何度も計算をして、長さをきめる。製罐作業は協同でやる。大ていの場合、いや、ほとんどいつも二人が組んで仕事をすゝる。

シモーヌ・ヴェイユ『工場日記』(田辺保訳)

十一月も終わろうとしているのに、生あたたかな正午だった。季節は一月か一月半ほど遅れている感じで、テレビのニュースがいつていた通り、ひよつとしたら地球の温暖化たらいもうもんが進んでるのかもしれないあと実藤徳一は考えた。

べつに深刻に考えたわけではなかった。地球温暖化を、徳一は、イラク戦争とか投資信託とかと同様、ただ言葉として聞き知っていただけだった。むしろ宮崎県が郷里の彼は、この時季をはずれた高い気温に不安になるより、ありがたいと思う気持ちのほうが強いのだった。

陽光が、大和川の川面をきらめかせていた。化学繊維とアルミでできた折畳式腰掛けに座った徳一は、白内障の進

行しつつある灰色がかった目で川の流れを眺め、穏やかにバターロールを咀嚼していた。阪神高速道路がはるか頭上で川を跨ぎ、往来する車のエンジン音が、虫の羽音が町工場の旋盤の音のようにかすかに、だが絶え間なしに聞こえた。

バターロールを三口で食べると、発泡スチロールの容器にはいったじゃがいものサラダをヨーグルトについているプラスチツクの匙ですくって口に運んだ。

それから魚肉ソーセージを一口かぶり、紙パツクにはいった牛乳をごくごくと音を立てて飲んだ。

またパンを食う、次いでサラダとソーセージ、また牛乳を飲む。こうしてなかなか盛んな食欲で、六十三歳の実

藤徳一は、晴れた週日のほぼ毎日、大和川の川原で昼食をとったのだった。

バターロールを三箇、スーパーで買ったじゃが芋のサラダ、朱色のセロファンで包んだ魚肉ソーセージ、牛乳三五〇ミリリットル。それが徳一の今日の昼食だった。

バターロールは、クロワッサンか干し葡萄入りのパン、ときには自分でこしらえるか、コンビニエンス・ストアで買ったかした握り飯に変わり、またポテトサラダは、分葱のぬた、卵の花、煮豆、たたきごぼうといったものになつたが、魚肉ソーセージと牛乳は欠かさなかった。なんといつでも牛乳は滋養があるという、いわば信仰を、徳一は抱いていたし、そして魚肉ソーセージは、彼が大阪に出てきて

以来の好物なのだった。

宮崎県の山間の中学校を卒業した春、実藤徳一は大阪に出た。集団就職という言葉ができるかできないかのころだった。延々と汽車に乗り、関門トンネルを抜けて、さらに汽車に乗り、ほとんど如実な感じのないままに大阪にたどり着いたのだった。そして、徳一は、そのままずっとこの町に生きてきた。

彼とともに、一緒に汽車に乗った同級生は集団ともいえないほど少人数だったが、徳一は、いまではそのほとんどの顔も名前も思い出せなくなっていた。

彼と同じように工場勤めをするもの、中央市場に勤める

もの、それから精肉店、青物店、牛乳店に勤めたものがい
た。大阪に来てまもなくのころ、寂しい彼らは、ちよくちよ
く会ったが、徐々に連絡は間遠になり、やがてとだえた。
最後に徳一が、同窓生の一人から聞いたのは、肉屋に勤め
たカツちゃんが（徳一は、その呼び名しか覚えていない）、
挽肉機に手をかまれて、数本指を失ったということだった。

徳一とともに大阪に出てきた子供たちのなかには、幾人
かの女子もいた。女中や店員、女工、パーマ屋の見習いに
なるということだった。

彼女らのうちで、泉佐野のタオル工場に勤めた房枝とい
う少女のことが、実藤徳一の印象に強く残っている。房枝
のことを思い出すと、還暦を過ぎたいまでも、徳一は顔が

火照るような気がした。

大阪に向かう列車のなかで、徳一と房枝は、向かい合わせの座席に座ることになった。処女と童貞たちは長旅の同行を大いにはにかんで、ぎこちなく離れ離れの席に着いたのだったが、互いにおとなしく、そしてぼんやりとしたたちの二人は、知らぬうちにその境界の外に押し出され、ふと気づくと向かい合わせに座っていたのだった。

徳一は、最初房枝の存在に気づいていなかった。もともと執拗な鈍さをもつ子供だったが、いつてみればこの日のハレの門出の雰囲気、上の空の気分をそこに付加していたようだった。

徳一の家族は、総出で彼を見送っていた。出征兵士を見

送るとでもいった気配が、漂っていたが、実際に出征兵士を見送ってから、まだ十年も経っていなかったのである。

祖母、母、生まれたばかりの赤ん坊を背負った四歳年上の姉、二歳年上の、徳一よりも更に鈍重な表情を浮かべた兄、二歳年下の弟たち。つまり彼らは双生児だった。徳一に父はいなかった。戦争に負けてまもなく、卒中で死んだのだ。

女たちは、さかんに泣いていて、男兄弟は、放心したようにホームに立ち尽くしていた。そして汽車の中の徳一も、彼の兄弟と同じような無表情で、見送る人々を眺めていた。少しは悲しい気持ちだったが、それをあらわすすべを彼は知らなかった。自分がいまだこへゆこうとしているのか、

そして何をしようとしているのかを、彼ははつきりと理解しているわけではなかった。少しは悲しく、少しは不安で、そして少々浮わついた気持ちだった。そして汽車はホームを離れたのである。

汽車が動き出すすぐに、徳一は竹の皮の包みをほどいた。姉が手渡してくれた握り飯だった。それを食べ終える、と、まず浮ついた気分が徳一から離れた。

悲しい気持ちもすぐに去って、やがて不安も消えた。なじみ深い平静な鈍さのなかに彼は戻った。考えることが不得手で、またその必要もなく暮らしてきた徳一だった。幸福も不幸もない受動性のなかで、彼は、いままでぼんやりと生きてきたのだ。目覚めていてもあまり変わりはなかつ

たが、徳一はうたた寝をした。

目覚めると、目の前で房枝が泣いていた。女は、汽車が郷里の駅を離れる前から絶え間なしに泣いていたのだ。珍しそうに徳一は目の前の女が泣くのを眺めていた。

彼は、自分でも思いがけず「泣くな」と声を出した。声変わりしたばかりの野太い声が、奇妙にしゃがれていた。そしてその瞬間に、このぼんやりした少年は、生涯で初めての恋をしたのである。房枝は、驚いて彼の顔を見た。彼はひどく赤面した。

房枝は、髪をお河童に切った、顔の丸い頬の赤い、眉が濃く、くりつとしたふたかわ目の、背の低い固太りの娘だった。美人とはとてもいえなかったが、愛嬌といえそうなも

のはいささか持ち合わせていた。それはあたりかまわず泣き続けるといふ感情の開放性に関係があるようだった。そして徳一などは思い及びもしなかつたが、それはどうやら性的な媚びと関係していなくもなかつたのである。

「泣くな」

なにかいわないといけないのではないかと思つたので、仕方なしに徳一は繰り返した。そういった途端、急に徳一の目から涙がこぼれた。それは感情の事故とでもいうべきものだつた。鈍重な感情生活を送つてきた徳一には、それはもちろん初めての経験だつた。彼は不意の涙を制御するすべを知らず、おろおろするとともに、なんだかとても爽快な気持ちにもなつた。

その様子を見て、あっけにとられたかのようにしばし泣きやんでいた房枝も、ふたたび盛大に泣きはじめた。

「泣くな」

徳一は泣きながらもう一度いった。そして上着のポケットから潇洒な赤い小函を取り出し、泣きながら房枝に手渡した。汽車に乗り込む前、祖母が彼に手渡した明治クリムキャラメルだった。泣きながら房枝は、箱から一粒取り、泣きながら徳一に返した。徳一もまた一粒とり、蠟引きの包み紙を剥いて、泣きながら口に入れた。汽車は車輪の単調な打音を響かせ、車窓から見える日向灘は、南国の春の光にきらめいていた。そして徳一と房枝は、泣きながら明治クリムキャラメルを食べつづけた。

続く

本作品は、雑誌「雲遊天下」第二八号掲載の『大和川』を加筆
訂正したものです。